様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００７６２

研究課題名（和文）目的指向の多人数・異文化会話コーパスの構築―共通語としての英語における相互行為

研究課題名（英文）Creating goal-oriented multicultural, multiparty corpus using LEGO: Interaction in English as a common language

研究代表者
谷村　緑（Tanimura, Midori）

立命館大学・情報理工学部・准教授

研究者番号：００４３４６４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ELF(English as a lingua franca)話者による課題達成会話を分析することで、異文化間の英語での合意形成の実態を探究するものである。過去の研究では、指差しやジェスチャー、イントネーションなど、言語の周辺にある行動は十分に注目されてこなかった。しかし、本研究ではこれらの要素を積極的に取り入れ、言語情報だけでなく、音声やジェスチャーといった非言語情報により、相互行為を包括的に把握することを目指した。そしてこうした正解のない課題に対して，参加者らがいかにして創造的に課題を乗り越えていくか，合意形成に向けてどのようなストラテジーを使用するのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多人数を対象とし，かつ異文化を背景とする者同士の英語での基盤形成のプロセスを解明する試みは，これまでの日本の会話分析，談話分析の研究を見ても未開拓の領域であり，現在の話しことば研究の裾野を拡げるという意義がある。また、近年，グローバル化を背景に，共通の母語を持たない者同士が「共通語としての英語」によってコミュニケーションをする機会が増えている。特に、ビジネスや医療などの短時間で合意形成が必要な場面では、英語による意味交渉能力がますます重要となっており、本研究の成果はこうした能力の向上に寄与することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore how agreement is reached in cross-cultural settings through analyzing conversations among ELF (English as a lingua franca) speakers striving to accomplish tasks. Previous research has often overlooked behaviors like pointing, gestures and intonation, peripheral to language. However, this study actively integrates these aspects to comprehensively understand interactions through various channels, including language, audio, and visual cues. By tackling such open-ended tasks collaboratively within groups, the study elucidates the strategies used for creative problem-solving and agreement formation.

研究分野：相互行為分析

キーワード：ELF　合意形成　パラ言語情報　課題達成会話　スタンス　ジェスチャー　物語生成　共同

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

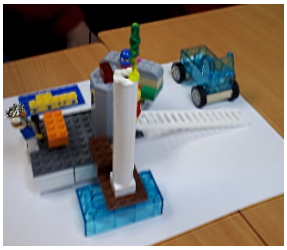
本研究グループは，先行する基盤研究（C）において，レゴ・ブロックを使用した二者間の英語学習者による課題達成対話コーパスを構築し，話し言葉に特徴的にあらわれる言語・非言語の現象（例．質問－応答ペア，対話の修復プロセス，メタファー表現，ジェスチャー）を分析してきた。そして，二者による相互行為にはジェスチャー，言い誤り，沈黙，音調といったパラ言語情報が強く関与していることを明らかにした。ただ前回の研究では，二者対話を研究対象としていたため，多人数でかつ言語能力が非対称な英語学習者データにみられるパラ言語情報を分析するための方法は確立できていなかった。その点は，今後の課題として残された。このような複雑なデータの非言語情報を詳細に分析するためには，より一貫したアノテーションが必要となることから，本研究では以下の研究目的を設定した。

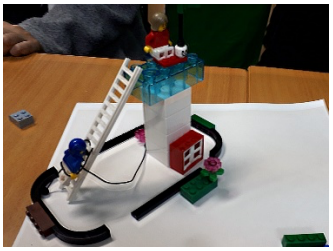
２．研究の目的

本研究の目的は，母語の異なる英語学習者による，多人数の目的指向型会話コーパスを構築し，言語・非言語情報の分析を通してどのような外国語運用が合意形成に寄与するかを解明することである。本研究では，①実験環境下での収録方法によって会話コーパスを構築し，②母語や習熟度の異なる英語学習者が合意形成過程でどのように課題を成し遂げるのかを，言語・非言語にあらわれる社会的・認知的捉え方の違いから分析する。さらに，③「共通語としての英語」における相互行為のプロセスを明らかにすることで，英語学習者にとって望ましい相互行為の在り方を検討する。現代社会がグローバル化するなかで「English as a lingua franca (ELF)：共通語としての英語」による意味交渉能力の育成が課題となってきている。なかでも，短時間で合意形成をすることが必要となるビジネスや医療の場面では，こうした能力を育成することが喫緊の課題となる。本研究は，こうした応用可能性を念頭に置いた萌芽的研究としての意義がある。

３．研究の方法

本研究の方法は３点に分けられる。第一に，母語の異なる英語学習者による多人数の目的指向型会話コーパスを構築した。今回の研究は，前回までの研究の延長上にあるもので，具体的には，参与者全員があるイメージを共有しながら，共同で自由にレゴ・ブロックを組み立てる作業に参与し，物語を創造的に生成させるというものである（Tanimura & Yamaguchi, 2018; 谷村，竹内，吉田，仲本，2019）。近年，グローバル化を背景に，共通の母語を持たない者同士が「共通語としての英語」によってコミュニケーションをする機会が増えていることから（Kramsch, 2014; Kramsch, 2018），今回構築した会話コーパスは，そうした場面において母語でない言語で人々がどのようにして相互理解を達成するかを知るための資源ともなる。なお，調査参加者は，　ポルトガル語，イタリア語，ポーランド語，スペイン語などのヨーロッパ言語に加え，日本語や中国語を含むアジアの言語を母語とする学生３１人が参加した。以下は，作品の一部である。





第二に，本究では，相互理解を達成するプロセス解明において，参与者が言語情報だけでなく，パラ言語情報（例．沈黙，発話の重なりなど）やジェスチャーをどのように利用しているかにも注目した。ELAN(注釈をつけるソフト)を使って，ビデオ録画の言語・非言語の情報にアノテーション（注釈）をつけ，それをどのようにトランスクリプトに反映させるべきかを分析した。第三に，母語や文化の異なる英語学習者が集まった際に，どのような方法で談話を構成し合意形成に至るのかを，言語表現（例．For what?）や会話における修復(例.repair)に焦点を当てて観察し，その背後にある認知的，社会的な物事の捉え方から分析した。

４．研究成果

(1) トランスクリプトの再考

これまで言語研究では等閑視にされがちであった，指さしや姿勢の変化，ジェスチャー，イントネーション，ポーズ，発話の重なりといった言語の周辺にあって相互行為全体を支えている行動を積極的にとりあげ，基盤化をうながすインタラクションの記述を行った。具体的には，会話研究を進める上で必要不可欠なトランスクリプトについて再考した。トランスクリプトとは，一般に言語情報だけでなくパラ言語情報（例．発話の重なり，ポーズ，笑い，時間情報など）も含む書き起こしを指す。つまり発話の内容を視覚的に提示するものであるが，その作成方法は厳密には規定されていない。そのためフィラーや笑いの長さ，発話の重なりの開始・終了位置，音調やスピードなどの記述には，複数の転記者間あるいは単独転記者内でも揺れが生じやすいという問題がある。このような問題意識に基づき，まずは，日本語話者による課題達成対話を対象に，ELAN によるトランスクリプト作成について議論した。手始めに，「発話の重なり」を含むトランスクリプト作成について検討した。本稿では，複数の転記者間および単独の転記者内での均一なトランスクリプトの作成方法に関して，発話の重なりに焦点を当てて検討した。そして ELAN と Excel のようなアプリケーションを使うことを前提に，分析のためのより均一的なトランスクリプトの表示方法を提案した。

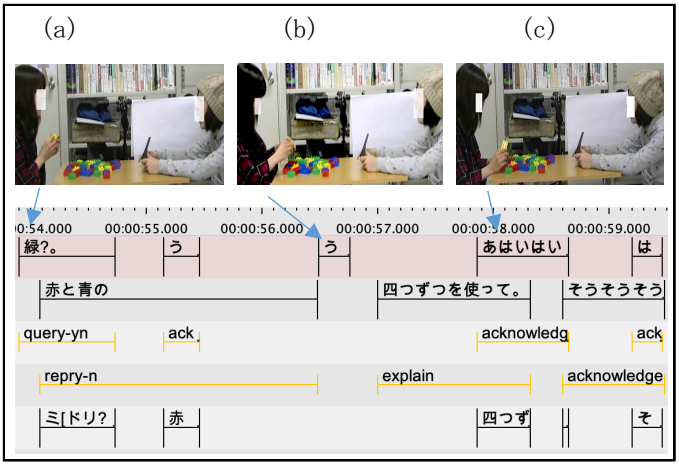


図１ ELAN の表示：発話の重なりが生じている断片

開始	終了	間隔		G	F	overlap
53901	54088	187			緑?。	
54088	54731	643				ミ[ドリ。
54731	55154	423	赤と青の			
55154	55464	310			うん。	赤と[青の。

55464	56488	1024			
56494	56764	270		うん。	
57009	57862	853	四つずつを使って。		
57862	58329	467			四つずつを[使って。
58329	58607	278		あはいはい。	
58607	58652	45			あはいはい[。
58652	59207	555	そうそうそうそう。		
59207	59467	260		はい。	そうそうそう[そう。
59467	59487	20			

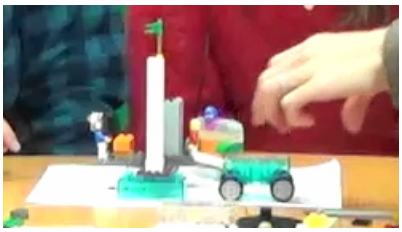
表１ELAN の表記を Excel で出力し補正したもの

このように作成した注釈はすでにトランスクリプトの役割を果たしているが（図１），分析のために注釈入力済みの ELAN を上記のように Excel で出力し補正した（表１）(G:教示者　F:作業者，時間の単位はミリ秒)。この表示の特徴は今回の分析対象である発話の重なりが時間情報とともに表示されている点である。また，発話の重なりの分析で重要となる，重なりの開始位置も（［ ）で特定できている。この表示であればトランスクリプトの記号が少ないため，会話分析の専門家でなくても理解可能である。パラ言語情報（例.あいづち，発話の重なり，沈黙）やジェスチャーは，対話において重要な役割を持つことが認識されているにも関わらず，音声情報として出現しないため研究が遅れている。本研究は，このような対話研究の不備を補完するという意義がある。

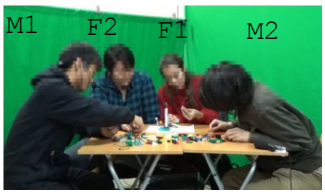
(2)象徴的能力（symbolic competence）と共通語としての英語(English as a lingua franca)

課題達成対話において，前置詞に続くwh-question の形式(例.for what?)がどのように使用されているのかを調査した。具体的には，for whatの形式が情報探索などの質問行動として使用されるのかもしくは挑戦的な行為として使用されるのかを分析した。

① 抜粋１



1 F1: but he:’s a criminal.
2 M1: he is not ah:=yeah.
3 M2: do we need a car?
4 F1: for[::
5 F2:　　[FOR WHAT? [h h h h h [h h h hhhh]
6 M2:　　[I don’t know　[hhh h　]
7 M1:　　[oh=yeah.
　　car:=to:=uh: transport- or [prisoner:
8 M2:　　[ah yeah [hhhh
9 F2:　　[hhhhhhh



F2 による for what?（5 行目）は，前後の発話と比べて発語の際の声が大きく，M2 に向けられた挑戦として聞こえる。これに対して，M2 はI don’t know(6 行目）と答えている。続いて， M1 が，(oh=yeah. car:=to:=uh: transport- or prisoner: そうそう，囚人を移送する車

(7 行目))と，挑戦と聴こえる質問に対して，情報を求める質問であるかのように返答している。そして M2 と F1 は合意に基づいて対応している（8 行目と 10 行目)。つまり，M1 には，F2 による挑戦的な発話を質問として再構成するという象徴的な能力（symbolic competence）があることを示している(Kramsch & Whiteside, 2008)。このように，本稿が扱う課題達成場面では，教師が作業場面をコントロールしたり、課題を整理したりすることはない。代わりに，ELF 話者自身が何をすべきかを決定し，関係を動的に交渉しながら状況に適応している。この事実は，ELF による課題達成は，課題参加者らが言語や多様なシンボルを適切に活用する能力を向上させ，問題解決能力を高める可能性があることを示唆しており，外国語での交渉場面といった実践的な場面で有用なスキルの獲得につながる考えられる。

(3)他者開始修正(Other-initiated repair)

重大な結果を伴う種類の仕事については，誤解を解くためだけでなく，その仕事をやり遂げるためにも修復が必要である(Searle, 1976) 。下記の例では，参加者のM1が意図した対象物を示す単語をイントネーションを上げて繰り返し，また，叙述的に言及することによって，問題を解決している。

② 抜粋２

```
18  M2:  They're: (life/up saver)^ ah:m, e:hm,
19       where's  the scalator? Scalator?
20  F1:  Scalator?
21  M1:  S,scala^-?
22  M2:  Yeah, the scalator.
23  F1:  Clator?
24  M2:  Tha,tha:::t climb one. Ah! this one.
25       [HH Isn't it].
26  F1:  [ AHH H H H ]
27  M2:  >Ah, ah, ah, ah,< sorry.          Yah. This
28       way hahaha
```

この例は，他者開始の修復が単に誤解を解くためだけでなく，共同作業を通した談話構成において，単一の単語で表現された創発的なアイデアをフレーズや文に拡張するためにも使用されることを示している。また，M1がフロアを支配するのではなく，他の参加者も積極的にターンを取っていることも示されている。これらの参加者は，タスク後のインタビューでも，グループワークから得られた「エンパワーメント」について述べていた。つまり，この課題を通じて，参加者らは共通語としての英語で共同的かつ創造的に会話をする方法を学んでいる(Kramsch, 2014)。このことは，課題達成型のタスクに取り組む際の参与者や課題といった周り環境が各参加者の能力を引き出したことも示唆している。

象徴的能力や創造的な言語能力を活用できるELF話者は，認知的かつ環境的なリソースを活用してコミュニケーションを円滑に進めることができる。そのため，教師の助けがなくても，言語的および文化的に多様な仲間と交流することが可能である。これらの能力は教室における教師と生徒の役割という伝統的な前提を覆すもので，ELF話者の言語行為の分析を通して，革新的なコミュニケーション能力向上のアプローチが見出される可能性がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 谷村緑、吉田悦子	４．巻 2
２．論文標題 英語学習者対面会話における左右の相互理解プロセス ―言語とジェスチャーの反復に注目して―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本教育工学会研究報告集	６．最初と最後の頁 289-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Midori Tanimura, Kazuhiro Takeuhi, Etsuko Yoshida	４．巻 123
２．論文標題 Silent Pause Dynamics in Task-Based Conversations: A Proficiency-Based Analysis of L2 Instructors and Builders	５．発行年 2024年
３．雑誌名 IEICE Tech. Rep.	６．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 谷村緑、川端良子、吉田悦子、竹内和広	４．巻 122
２．論文標題 音声・ビデオ課題達成対話の均一的なトランスクリプト作成に向けて ～ 発話の重なりを中心に ～	５．発行年 2023年
３．雑誌名 信学技報	６．最初と最後の頁 48-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 Masataka YAMAGUCHI, Midori TANIMURA	４．巻 16
２．論文標題 A Pragmatic Analysis of Interactions among Speakers of English as a Lingua Franca on a LEGO Task: Exploring the functions of other-initiated repairs in ELF communication	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Proceedings of the 23rd Conference of the Pragmatics Society of Japan	６．最初と最後の頁 129-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 谷村緑、竹内和広、吉田悦子、仲本康一郎、山口征孝	４．巻 TL2020-21
２．論文標題 ELF多人数課題達成会話における質問ー応答連鎖　感情と心的態度を示すパラ言語情報を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 信学技報	６．最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 谷村緑・竹内和広・吉田悦子
２．発表標題 ELF多人数課題達成会話におけるパラ言語情報分析の課題・問題点
３．学会等名 思考と言語研究会(TL)（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masataka Yamaguchi and Midori Tanimura
２．発表標題 Learning to use English in the era of globalization: The case of international students on a LEGO task
３．学会等名 AILA (International Association of Applied Linguistics) (Online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷村緑
２．発表標題 目的指向の多人数・異文化会話コーパスにおけるスタンスの表明と調整－人称代名詞I，we，youの相互行為上の役割－
３．学会等名 日本英語学会第39回大会（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yamaguchi Masataka, MidoriTanimura
２．発表標題 A pragmatic Analysis of interactions among Speakers of English as a Lingua Franca on a LEGO task: Exploring the functions of other-initiated repair in ELF communication
３．学会等名 日本語用論学会 第 23 回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉田悦子
２．発表標題 発話未満レベルの要素と基盤化：日本人英語話者の「あいづち」を中心に
３．学会等名 JACET 談話行動研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 谷村緑、仲本康一郎、吉田悦子（編）	４．発行年 2024年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 196
３．書名 インターラクションと対話	

１．著者名 谷村緑、仲本康一郎	４．発行年 2022年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 184
３．書名 一歩進める英語学習・研究ブックス メタファーで読み解く 英語のイディオム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　悦子 (Yoshida Etsuko) (00240276)	三重大学・人文学部・教授 (14101)	
研究分担者	山口　征孝 (Yamaguchi Masataka) (20779300)	神戸市外国語大学・外国語学部・教授 (24501)	
研究分担者	仲本　康一郎 (Nakamoto Koichiro) (80528935)	山梨大学・大学院総合研究部・教授 (13501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関